

松野純孝著

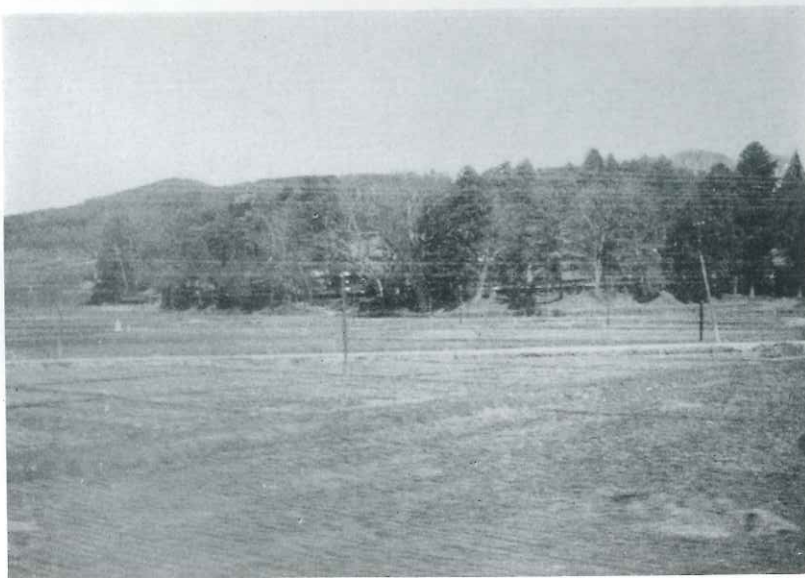
增補
親鸞

東本願寺





6 国府方面より山寺薬師・栗沢周辺を望む



7 稲田草菴趾付近

は し が き

親鸞が生まれたのは承安三年（一一七三）である。この前年の承安二年には平清盛の女徳子が高倉天皇の中宮となり、翌四年には後白河法皇の敵島御幸、清盛以下平家一門がこれに扈從し、平氏にあらざれば人にあらずの時代であった。ところが、それから七年後の治承四年には、源頼朝、義仲の挙兵。やがて義仲の敗死、つづいて平氏の滅亡、そしてこの平氏に代わった源氏によって、京都を離れた鎌倉という新たな土地に、幕府という全く形態の異なった武家政治が始まろうとした、実にめまぐるしい時代であった。

このような中に親鸞は生まれた。親鸞はこれより九十年生きた。親鸞の歿した弘長二年（一一六三）は、やがて蒙古の襲来する文永・弘安の役をむかえようとしていた時期に相当し、鎌倉幕府の執権政治もその絶頂にあった。そしてこの文永・弘安の役を曲りかどとして執権政治も崩壊し、世はまさに南北朝の動乱となる。このような歴史の歩みのなかに、親鸞は約一世紀にわたって生きていたのである。一公家の子として生まれた親鸞を考えると、このような公家社会の亡びゆく時代であっただけに、九十年の生涯は単に生きたというごときものではなく、生きつづけた、生き抜いた、というほうがより適切であろう。私はこのような歴史の転変のなかに、親鸞が自己をめぐる歴史的現実、どのように対処し、どのようにして生きつづけた、どのような人間形成の途をたどっていったか、をみようとした。そこには言い知れぬ悩みがあり、苦しみがあ、またよろこびもあつたはずである。そのような悩みや苦しみにどのように耐え、どのように人生のよろこびを見いだしていったか、をみようとしたのである。

これまで親鸞に関する研究はおびただしい数にのぼっている。けれどもそこでは、呱呱の声をあげたときの親鸞と九

十歳において歿するときの親鸞とは、同一として扱われていた憾みがあったことは否めないであろう。親鸞はこの世に生をうけたときに、すでに九十歳の境位にまで達しているのである。そこには神秘化され、完成された親鸞はあるが、現実にもそこに生き、現実にもそこに動いている、親鸞の人間像は見られぬのである。私はこのような研究に一つの物足りなさを感じていた。これにはもちろん、宗教感情からなされた強い要求もあったろうし、また親鸞研究にとって最も大きな障碍となっているいちじるしい史料制約や限界の存していた事情も手伝っていたであろう。このようななかで、親鸞の思想の展開過程を跡づけるということは容易なことではない。

ところで、最近、歴史学の分野からも、親鸞が取り上げられるようになった。そのため親鸞に関する研究はとみに前進した感がある。このような諸先学の成果に力を与えて、親鸞の生涯とその思想の展開過程とを跡づけてみようとしたのがこの小著である。私はできるかぎりの史料を求め、諸先学の研究成果に導かれつつ、努めて虚心に史料を読むことにした。そのため、今までよく知られていた史料でも、そこに従来とは全く異なった意味のあったことを見いだしたように思う。親鸞の研究には、新しい未知の史料をもたえず蒐集することの肝要であることは言うまでもないが、それにもまして大切なことは、何よりもまず今までの既知の史料でもこれをけつしてゆるがせにすることなく、いく回ともなく丹念に読み、そこに不断に新しい意味を見いだしてゆくことであると思う。

私はこれまで右のような親鸞の研究のために、親鸞の育った仏教の伝統的教理と、親鸞をめぐる歴史的社会的諸条件と、親鸞の個性との、これら三つの要素のからみ合いの中に、親鸞の人間形成の過程をとらえようとしてきた。けれどもこれはきわめて大胆な試みであるだけに、単なる一仮設にすぎぬともいえる。そこには私の主観や恣意がまた多分に出ていと思う。これらの点については、手きびしい御叱正を願いたいと思っている。

この小著の最後に至って取り上げねばならなかった親鸞の上下関係を撥無した慈悲の立場や、父母兄弟といった私的関係を超えて、鳥や蟻のごとき生物は言うに及ばず、山川草木国土にいたるまで遍満しようとした四海同朋思想が、どのようにして打ち樹てられていったか、については、けつきよく私の思索と体験との至らないため、十分に説明することができなかった。私はここで筆を投げざるをえなかったことを告白する。私はただ生の史料を提示してみたにとどめた。したがって、この問題は私の今後の課題としたいと思っている。

小著の成るに当たって私事に属して恐縮であるが、少しく述べさせていただく。私は仏教学においては、宮本正尊先生をはじめ、花山信勝・結城令聞・中村元・平川彰の諸先生から日頃の教導にあずかり、多くの学恩をうけた。歴史学においては、香原一勢・笠原一男の両氏から私の弱い面をたえず批判していただき、機会に恵まれては、赤松俊秀・家永三郎・田中久夫の諸先学に貴重な示教をえた。また書誌学的な面とかその他の点については、宮崎円蓮博士や今枝愛真氏をはじめ、吉田久一・菊地勇次郎・大橋俊雄の諸先学ならびにそのほか幾多の知己からいろいろと有益な指示にあずかった。

本書は昭和三十三年度の研究成果刊行費補助金の交付を受けた。株式会社三省堂は本書の出版を快諾され、同出版部の武田新吉・桜井明・長谷川昭二の各氏には、私の勝手気儘を許していただいた。口絵の写真については、佐々木求巳・日野顕正の両氏に負うものが多い。小著のなるにおよんで、いささかこれらの方々に対し、厚く御礼申上げる。

一九五九年二月二七日

松野純孝

本書は株式会社三省堂より昭和三十四年に出版されたものである。このたび三省堂と契約を交わし、増補を伴って真宗大谷派宗務所（東本願寺）出版部から復刊することとなった。折しも二〇一一年は宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が本山東本願寺で勤められる年である。御遠忌を期して本書が復刊されることは、親鸞聖人の研究に大きく寄与すると共に、その生涯と思想に多くの人が触れることになると思ふ。信じてやまない。

なお、このたびの復刊にあたり、現代では差別表現とされる箇所については、著者に確認のうえで訂正したが、その他の部分はそのままとした。ご了承願いたい。

二〇一〇年六月十五日

真宗大谷派宗務所（東本願寺）出版部

目次

はしがき

第一章 吉水時代の親鸞……………一

第一節 源信と親鸞……………一

第二節 廻心……………三

第三節 教人信……………三

第四節 女犯の問題……………四

第五節 源空の基本的態度……………五

第二章 承元の念仏弾圧……………六

第一節 承元の法難……………六

第二節 門弟の動き……………六

一 安楽・住蓮……………六

1 「偏執」の勸進……………六

2 源空門下における安楽・住蓮の位置……………七

3 六時礼讃……………七

二四	意	二五
三	行空・幸西・証空	六六
三	節 念仏に対する公家の態度	一〇〇
三	章 親鸞の思想における一念義	一一三
一	節 一念義	一一四
二	節 源空と一念義	一一〇
三	節 一念義と親鸞	一一六
四	章 越後時代の親鸞	一二六
一	節 結 婚	一二二
一	結婚の事情	一二二
二	恵信尼の素性	一二七
二	節 初期の教団	一八六
三	節 野積の山寺	一九三
四	節 「教行信証」の誕生	二〇五
五	章 東国への旅	二二五
一	事 の 縁	二二五
二	自信・教人信	二二七

第六章 源空・聖覚・親鸞

一	節 源空と聖覚	二三三
一	行 実	二三三
二	思 想	二三九
二	節 聖覚と親鸞	二四四
一	行 実	二四四
二	思 想	二六六
三	節 承久の変と聖覚・親鸞	二七九
一	承久の変と親鸞	二八〇
二	承久の変と聖覚	二九〇
四	節 「唯信抄」の成立	二九六
五	節 聖覚における二、三の問題	三一
七	章 真宗の浸透と親鸞の帰洛	三三三
一	節 念仏の伝播と東国	三三三
一	念仏宗・阿号・不断念仏	三三三
二	臨終正念と念仏	三三三
二	節 聖徳太子・善光寺如来	三四三

第三節 一念信心往生……………三六

第四節 親鸞の帰洛……………三六

一受 容 曆……………三六

二帰 洛……………三九

第八章 帰洛後の親鸞一家……………四〇

第一節 家族の上洛……………四〇

第二節 とひたのまき……………四一

第三節 一家の分散とその理由……………四三

第九章 親鸞とその門弟……………四四

第一節 放逸无慚・造悪無碍……………四六

第二節 他力中の他力……………四八

第三節 如来等 同……………四七

一 弥勒等 同……………四七

二 義なきを義とす……………四九

第四節 「某閉眼せば賀茂河にいれてうほにあたふべし」……………四九

補 遺……………五〇

補 補……………五二

増 補……………五二

恵信―親鸞の回心―……………五三

女犯 偈……………五五

復刊にあたって……………五九

図版目次

- | | | |
|---|----------------------------|-------|
| 1 | 親鸞像(鏡御影) | 西本願寺蔵 |
| 2 | 真仏書写「親鸞夢記」 | 専修寺蔵 |
| 3 | 親鸞自筆「観无量寿経集註」 | 西本願寺蔵 |
| 4 | 親鸞自筆書状「かさまの念佛者のうたがひとわれたる事」 | 東本願寺蔵 |
| 5 | 慶信上書と親鸞の補筆 | 専修寺蔵 |
| 6 | 国府方面より山寺薬師・栗沢周辺を望む | |
| 7 | 稲田草菴趾付近 | |

第一章 吉水時代の親鸞

第一節 源信と親鸞

親鸞が九歳で比叡山に登り、二十九歳で源空に帰依するまでの二十年間の在叡生活が、どのようなものであったかについての研究は、現在までのところほとんど未開拓状態におかれていると言ってもよからう。いったい親鸞に関する研究が汗牛充棟のありさまであるにもかかわらず、この在叡時代の研究が皆無に等しいということはなぜであろうか。これは一つには親鸞のこの時代の直接史料の欠如ということにもよろうが、それよりも親鸞が「やまをいで」^(世)て、源空の吉水草菴へ入ったことを親鸞が叡山の伝統と全く訣別したとと解し、そのことからはや親鸞を見る上には一顧の価値もないもののように考えられたためではなかったらうか。ところではたしてそう言い切れるかどうか。その前にわれわれは彼の七十六歳の時の「浄土高僧和讃」の中でうたっている山の人であった源信について注意する必要がある。

本師源信ねむごころに

一代佛教のそのなかに

念佛一門ひらきてぞ

濁世末代すゝめける

なお源信についてこのほかに九首うたっている。この「浄土高僧和讃」は彼の法燈における血脈相承を明らかにしたものであって、すなわち竜樹菩薩・天親菩薩・曇鸞和尚・道綽禪師・善導禪師・源信大師から彼の直接の師源空に及んでいる。このほかに彼は「教行信証」行巻の結びにも、「正信念佛偈」としてこの七僧についてうたっている。してみると、叡山の源信は彼の血脈相承の上に確乎たる地位を占むべきものであり、したがって彼の在叡生活、さらに叡山の伝統はこれを無視することはできないことになる。

ところで、叡山時代を知る確実な史料としては、彼の妻惠信尼の書状の「殿(比叡)のひへのやまに(山)だうそうつとめておはしましける」という一句だけにすぎない。この「だうそうつ」(堂僧)をどのように考えるかで、彼の在叡時代が規定されている。山田文昭氏はこの堂僧を常行三昧堂に奉仕していた不断念仏僧とし、地位もきわめて低かったとしている。この山田説はほとんど定説となって今日に至っている。けれども、「小右記」永延二年十月廿九日の条に、法皇が叡山に御幸して常行堂から法華堂へ向かった折のことを次のように記している。

了向給常行堂、被修念佛、了禮給法華堂、御懺法、事依率爾、被取堂僧見參、追可給物

これによると、堂僧は法華堂で懺法も勤めているが、たとい、「事依率爾」の事情もあるにせよ、法皇と直接し、法皇から何かを給せられるほどの身分でもあったということができよう。もつともこの記録は永延二年(九八八)のものであるから、親鸞の堂僧時代をさかのぼること約二百年で、はたしてこれを証する史料としてどうか、疑問がないではない。

ところで、融通念仏の祖とされる良忍については、「後拾遺往生伝」巻中には「上人良忍者、台嶺首楞嚴院禪徒也」とあり、同巻下には「沙門良仁者、叡山住侶也。早入三堂僧。久勤三寺役」とある。またこの「後拾遺往生伝」よりのちに編纂された「三外往生記」には、「良忍上人者。延曆寺東塔常行堂衆也」とある。「三外往生記」の編者は、「後拾遺往生伝」の巻中・巻下に見える良忍伝を合糅しているようである。一方、「後拾遺往生伝」巻中・巻下に見える二

人の良忍(七)は、大原山に移住した点では共通しているが、大原隠棲以後の行実では必ずしも同じでない。だから別人として考えていたのかもしれない。しかし、「後拾遺往生伝」のほうが「三外往生記」よりもさきであるから、良忍は首楞嚴院にいたとする説のほうが尊重されてよいであろう。そしてここで興味あることは、「後拾遺往生伝」よりさらに遅くして編纂された「三外往生記」においてさえ、そうした融通念仏の開祖とされた良忍を、堂僧よりもさらに低い地位にあつたと一般に考えられている堂衆の出として記していることである。これは明らかに堂僧よりもさらに低い堂衆の身分でも、融通念仏の開祖になりうるといふ考え方が、当時存しえた証拠でもあろう。こうして、私は親鸞が一堂僧の身分であつたことを唯一の理由として、彼の在叡時代における内面的体験はもとより、学解の面までをも低く浅く評価しようとする従来の諸説に対して疑義を持つのである。

藤原猶雪博士は、親鸞の登山当時、叡山の常行堂には、常行三昧院(又は般舟三昧院、東塔講堂の北にあり)、西常行堂、楞嚴三昧院の常行堂(横川砂碓堂の東北にあり)の凡そ三か所あり、これらのうち親鸞の登山に関係あつたと伝える慈円(四)は首楞嚴院の檢校となつていたので、親鸞の堂僧として勤めた常行堂もここであつたと推定している。この見解は妥当だと思ふ。そうすると、親鸞もかつて良忍のいた横川首楞嚴院の常行堂に勤めていたことになる。そして源空の師事した西塔黒谷の叡空はこの良忍の弟子であつたといふ。そこでこうした横川の伝統に、源信↓良忍↓叡空↓源空から親鸞へと連なる必然性がひそんでいたのではなからうか。

さて、親鸞の「教行信証」の結びの自叙によると、彼は吉水の源空に掃投してから四年後の元久二年、源空の「恩恕」をこうむつて、「選択本願念仏集」の書写を許されたという。そして同年四月十四日に、師源空から「選擇本願念仏集」という内題の字および「南无阿弥陀佛往生之業念佛爲本」と、付属のしるしである「釋綽空」との文字とを、「眞筆」でいただいた。そればかりか、同日、師の「眞影」を申し預かり図画することをも許された。やがてその図画

ができあがると、こんどはまた同年閏七月二十九日に、その真影の銘に「南无阿弥陀佛」と「若我成佛十方衆生稱我名号下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」との「眞文」をいただいた。そして同日、夢告によって「綽空」の字を改め、「以御筆令書名之字畢」という。

「選択本願念仏集」は本来、「埋于壁底」めて公開してはならない性質のものであった。だからこの書の見写を許されたものはごくわずかで、現在知られているものは、証空・源智・聖光・隆寛・幸西・親鸞の六人にすぎない。まことに親鸞も述べているように、「涉年涉日、蒙其教誨之人雖千萬、云親云疎、獲此見寫之徒、甚以難」であつた。源空の教誨にあずかつたものがはなはだ多かつたにもかかわらず、その書写を許されたものはただの十指にも及ばなかつた。その中に、入室後わずか四年にも満たなかつた親鸞が入つたのである。剩え彼は右のように、内題をはじめとして真影の図画を許され、源空自筆の銘文にまであつたのである。源空はもともと自から筆を執るといふことはあまりなかつたという。それにもかかわらず、親鸞にはこのように自ら筆を執つて、かように書き与えているのである。これこそ破格のこととせねばなるまい。親鸞はこの感激を「悲喜之涙」を抑さえて、次のようにしている。

是專念正業之徳也。是決定往生之徴也。

こうした決定往生の「徴」は、入室してからわずか四年にも満たない間に得られるごときものであろうか。私にははなはだ疑問なのである。それにはどうしても彼の吉水時代以前の生活、すなわち登山時代における心境の開けていたことを考えないわけにはゆかないのである。覚如は「本願寺聖人伝絵」で、親鸞の在叡時代を、

自余以來しばらく、南岳天台の文風をとぶらひて、ひろく三觀佛乘の理を達し、とこしなへに楞嚴横河の餘流をたへて、ふかく四教圓融の義に明なり。

と記し、また存覚は「歎徳文」で、

博覽涉内外、修練兼顯密、初習俗典、今切礎。此是在伯父業吏部之學窓、所抽聚螢映雪之苦節也。後携円宗、分研精。此是陪貫首鎮和尚之禪房、所聞大才諸徳之講敷也。依之、十乘三諦之月、觀念送種、百界千如之花、薰修累歳。

と述べている。文中、伯父業吏部とは親鸞の伯父宗業のことである。宗業は文章博士となり、のちに侍読および昇殿を望んだとき、九条道家に「宗業其身太下品物也」のゆえにそのような望みは「太不可然事也」と言われたごとき身分であつた。けれども、この年の十二月二十六日に昇殿を許された。それは藤原定家も「式部大輔宗業被聽昇殿、當時之政驚耳目事太多、是賞文之故々」とその感想を漏らしているところにかがわれるように、宗業の「賞文之故」であつた。それほど彼は文章博士として、当代に知られていたのである。

親鸞はこのような宗業を伯父としていたから、漢籍の素読も早くからなしていたと思われる。また養父範綱も文章生であつた。彼の家系は「尊卑分脈」藤原内廩公流・同南家貞嗣卿流、および「大谷一流系図」によると、院政期には代々文章博士を勤めている。このような環境に育つた親鸞に学問の縁が薄かつたとするはできないであらう。

前田慧雲博士によると、親鸞には天台慧心流の影響が少なくないという。すなわち慧心流の特別な解釈法としての字訓釈・字象釈・転声釈が親鸞の著述に見えており、それがまた彼をして独創的な思想を展開せしめる役割をなしていると言っているのである。この前田博士の指摘は章節を追って明らかにしてゆくように、親鸞において特に認められるものである。これによつても親鸞を考える上に、在叡時代を忽諾に付すことの正しくないことが知られる。

私はこうした意味で、それぞれ源信・永観・源空・親鸞の主著と思われる「往生要集」「往生捨因」「選択本願念仏集」「教行信証」の四本における経・論・釈などからの共通した主なる引用文を対照してみようと思う。それはこのよ